主体的な学びを支える大学図書館の学修・教育支援機能
―ラーニングコモンズと情報リテラシー教育を中心に―

長　澤　多　代
（三重大学附属図書館研究開発室）

Learning and Instructional Support Services Provided by College and University Libraries: Focused on Learning Commons and Information Literacy Instruction

Tayo Nagasawa
(Research Development Office, Mie University Library)

Summary

In Japan, colleges and universities have undergone massive educational reform since the 1990s. By switching to active learning and activating course design, they have been training students as active and lifelong learners. In this context, college and university libraries have provided various learning support services to students and instructional support services to faculty members. To further enhance learning outcomes, these services should be integrated into both course instruction and educational reform. The purpose of this paper is to discuss how college and university libraries can actively engage in educational reform, from the perspectives of information literacy instruction and learning commons.

Most libraries have provided students with information literacy instruction such as course-related instruction in the courses. Some have developed pathfinders as navigators to information resources. During the past decade, the number of learning commons has increased significantly in Japan. In learning commons, as well as physical spaces such as collaborative learning areas and work station areas, various learning support services relating to information retrieval resources and writing papers have been designed by faculty members, librarians, ICT support staff and student assistants.

キーワード：大学図書館の学修・教育支援機能、ラーニングコモンズ、情報リテラシー教育、アクティブラーニング
Keywords: college and university libraries, learning and instructional support services, learning commons, information literacy instruction, active learning

はじめに

近年の日本の大学教育改革では、アクティブラーニングへの転換や教室内外の学修時間の確保を図りながら、学生の主体的に考える力や生涯にわたって学び続ける力を育成することがこれまで以上に求められるようになった。その中で，大学図書館の機能の強化が求められている（中央教育審議会、2012）。大学図書館内では、多様な情報資源の利便を図ったり学修のための環境を整備したりするなど、学修・教育支援機能の強化を図ってきた。だが、大学図書館の改革を教育の質的転換に実質的に結びつけるためには、大学全体の改革に組み入れることが重要になる。

本稿の目的は、主体的な学びを支える大学図書館の学修・教育支援機能について、情報リテラシー教育とラーニングコモンズに焦点をあてて、大学教育改革との接点を示しながら，その動向を整理して説明することにある[1)]。全体は4章からなる。第1章では、大学図書館の機能、学生対象の学修支援サービス及び教員対象の教育支援サービスについて概説する。第2章では、情報リテラシー教育を組み入れたアクティブラーニングの設計と運用について説明する。第3章では、教室外の学修環境としてラーニングコモンズの設計、運用、評価について詳述する。第4章では、全体を整理してまとめ、今後の課題を述べる。

1. 大学図書館の学修・教育支援機能

1.1 大学図書館の機能

大学図書館の目的と役割は、大学の教育、研究、地域貢献の諸活動において、学生や教職員が必要とする資料や情報を効果的かつ効率的に提供することによって、大学の目的の達成を支援することである。主な機能として、学修・教育支援機能、研究支援機能、公共的機能（地域貢献機能）がある。学修・教育支援機能は大学の教育目標と方法に適合した情報資源と学修の場を主に学生や教員に提供することで、研究支援機能は網羅的で充実したコレクションの構築と高度な調査機能を主に教員や大学院生に提供することである。公共的機能は国民の生涯学習や産業界の研究開発を支援することで、地域文化の中心的な施設として市民に開放したりする（石井、1999）。

これまでの大学図書館では、研究支援機能の強化に重点を置いてきたが、近年の大学教育改革の流れを受けて、学修・教育支援機能の強化についても検討するようになった。『大学図書館の整備について』（審議のまとめ）では、現在に求められる大学図書館の機能や役割として、「学習支援及び教育活動への直接の関与」を筆頭にあげ、学生による主体的な学修の成果の向上を図るために、情報リテラシー教育などの学修支援を提供したりラーニングコモンズなどの学修環境を整備したりすることが必要になると指摘している（科学技術・学術審議会、2010）。『学修環境充実のための学術情報基盤の整備について』（審議のまとめ）では、大学図書館を含む学術情報基盤の整備について、図書や雑誌等の学術コンテンツ、ラーニングコモンズ、大学院生・教員・図書館員による学修の支援などの観点から取り組みの方向性を示している（科学技術・学術審議会、2013）。国立大学図書館協会は、2012 年に教育学修支援検討特別委員会を設置し、大学図書館の学修・教育支援機能を充実させる方策について検討し始めた。その中で、教育課程と連携した図書館による学修支援、日本版の情報リテラシー能力の基準（ACRL, 2000）、情報リテラシー教育の担当者の育成を重点事項に定めて調査検討を進めている。

1.2 大学図書館の学修支援・教育支援

大学図書館が提供する学修支援サービスや教育支援サービスは、大学教育改革の多くの場面に接点を持つ。そのひとつは、授業計画に学修支援サービスを組み入れることである。教員には、事前の準備、授業の受講、事後の展開を促すアクティブラーニングを設計することが求められている。大学図書館は、授業に必要になる多様な学術コンテンツを整備したり、初年次導入科目その他の授業科目で図書館利用のガイダンスや情報検索演習などの情報リテラシー教育を提供したり、多様な学修形態に対応した教室外の学修環境としてラーニングコモンズを整備したりすることで、教員が設定した学修目標の達成を支援することができる。また、教育支援サービスとして、新任教員オリエンテーションで図書館サービスの案内をしたり、FD ワークショップで情報検索や教材開発関係の演習を提供したりすることによって、図書館に対する教員の理解を深め、教員が多様な学術コンテンツや図書館のサービスを効果的に組み入れて授業を設計・運営するのを支援することができる。大学図書館における先進的な取り組みの実践例については、文部科学省のウェブページで紹介されている（文部科学省、2013b）。

以下、情報リテラシー教育とラーニングコモンズに焦点を当てて、その機能を説明する。

2. 情報リテラシー教育を組み入れたアクティブラーニングの設計と運用

2.1 情報リテラシー教育

学生が主体的に問題を発見し解を見いだす過程では、紙媒体や電子媒体の情報を含む多様な情報資源の中から、必要となる情報を効果的に探索し、信頼できる情報を選択することが求められる。だが、すべての学生が情報を使いこなしているわけではない。前述の『大学図書館の整備について』では、これを次のように指摘する（科学技術・学術審議会、2010）。

> 現在、情報環境が豊かになり、多様な情報に容易にアクセスできるようになったが、多くの学生はそれらの分析と選択のスキルが不十分であり、利用可能な関連する情報を常に入手できているわけではないことに留意する必要がある。

表１　図書館利用教育ガイドライン：大学図書館版

レベル 1	印象づけ (図書館の存在・役割・機能)	ポスター，パンフレット，ちらし，オリエンテーション
レベル 2	サービス案内 (設備の配置，サービスの種類)	図書館の見学ツアー，館内のサイン，学内の広報誌
レベル 3	情報探索法指導 (情報資源の検索，情報の評価)	科目関連指導（授業，ゼミ），独立科目，チュートリアル，講習会，カウンターでの指導，パスファインダー，独習用ツール，ワークブック，テキストブック
レベル 4	情報整理法指導 (要約・引用，記録・発想法)	
レベル 5	情報表現法指導 (レポート，口頭発表，著作権)	

これは、情報が氾濫する現代社会において、学生が情報リテラシーを身につけることが重要になることを示唆している。情報リテラシーは多様な定義をもつが、問題解決のために情報を主体的に活用する能力と言うことができる（Grassian, 2009；野末、2010）。米国大学図書館協会の「高等教育のための情報リテラシー能力基準」では、情報が必要なときに、それを認識し、必要な情報を効果的に見つけ出し、評価し、利用することができるように、個々人が身につけるべき一連の能力と定義している（ACRL, 2000）。

情報リテラシー教育は情報リテラシーの向上や習得を支援する多様な取り組みである。図書館関係者は、長い間、図書館の効果的な使い方を利用者に伝える図書館利用教育を提供してきた。近年、図書館利用教育を、所属するコミュニティ内の諸活動との結び付きに力点をおく情報リテラシー教育へと転換し、図書館を取り巻く文脈との関係を強調するようになった（野末、2010）。情報リテラシー教育の内容や方法については、『図書館利用教育ガイドライン』（日本図書館協会・図書館利用教育委員会、2003）がその枠組みを示している（表 1）。このうち、レベル 3、4、5 にある科目関連指導が授業科目とのかかわりが強い。

2.2　授業科目に組み入れた情報リテラシー教育

科目関連指導は、特定の授業科目で必要になる情報の探索法・整理法・表現法に関する講義や演習である。レポートやプロジェクト学修を課す授業科目に組み入れることが多い。通常は、教員が図書館に申し込み、図書館員が授業時間の一部を用いて行う。主な学修目標は、学生が、図書館（員）が自分たちの学修活動を支援する機関（職員）であると認識すること、探究のプロセスを理解しこれに情報利用を位置づけること、参考図書やデータベースの特徴を理解し効果的に利用できることである。多くの学生は、図書館を図書を借りられる機関と認識してはいるが、授業内外の学修活動への支援を受けられる機関とは認識していない。大学図書館の学修支援機能を知ることが、その後の効果的な図書館の利用につながる。

科目関連指導については、米国で多くの実績がある（Jacobson et al., 2007）。その中でも、アーラム・カレッジ（Earlham College）では、1960 年代から教員と図書館員が連携して科目関連指導に取り組み、成果をあげている（長澤、2007、2012a、2012b）。日本でも、多くの大学図書館が情報リテラシー教育を実施している。2006 年の時点で、141 大学が情報リテラシー教育に関する授業を実施し（調査対象 194 館の 73.4％）、そのうち 95 大学（同 49％）は図書館員が授業科目の一部もしくは全体に関与する情報リテラシー教育を実施している（永田ら、2007）。このすべてが教員と実質的に連携したものではないが、静岡大学など実質的な連携にもとづいて科目関連指導を実現する例も見られるようになった（渡邉、2013）。

情報リテラシー教育の実施と並行して、パス・ファインダーを作成する大学もある。パス・ファインダーは、特定のトピックに関する紙媒体や電子媒体の情報を系統的に集める手順をまとめた一枚もののリーフレットである。近年では、電子版もある。学生には、パス・ファインダーを手がかりとして、情報を主体的に探索することが期待されている。千葉大学、名古屋大学、三重大学では、授業科目ごとにパス・ファインダー（授業資料ナビ）を作成し、紙版を授業で配布したり、電子版をウェブ上で公開したりしている。

2.3　情報リテラシー教育を組み入れた授業の設計と運用

科目関連指導の内容や方法は授業科目ごとに異なる。主な内容として、図書、雑誌論文、新聞記事、百科事典に関するデータベースの検索演習や、レファレンスサービス（参考調査）、リクエスト制度、相互貸借（図書や複写物の取り寄せ）などの図書館サービスの案内に加えて、引用の方法、参考文献の記載法、著作権や剽窃についての説明がある。図書館の施設や設備を案内するツアーを組み入れることもある。学修成果を高める上で重要になるのは、教員と図書館員が事前に打ち合わせを重ねて、その授業科目の学修内容や方法、レポートやプロジェクトのテーマにカスタマイズした科目関連指導を設計することである。図書館員は、シラバスの記載内容や打ち合わせで確認した事項をもとに、紹介する図書や雑誌、データベースを探索するキーワードを設定する。これによって、学生は情報の利用を自らの解決すべき問題と関連づけて理解することができる。情報探索に対する学生のニーズが高まるレポートやプロジェクトのテーマを決定した直後（教える好機）に実施日を設定すること、教員が授業の中で科目関連指導の内容や図書館（員）の学修支援機能について学生に繰り返し伝えることも、学修成果の向上に重要な役割を果たす（長澤、2007、2012b）。

3. 教室外の学修環境としてのラーニングコモンズ

3.1　ラーニングコモンズとは

ラーニングコモンズには、多様な定義があるが、学修支援サービス、情報資源、設備を総合的にワンストップで提供する学修空間と言うことができる（呑海ら、2011）。コモンズは共有空間を意味する。もともとは、市場など、居住区内の開かれた空間を意味していた（Beagle, 2004）。従来の大学図書館では、主として、学生がひとりで静かに学修する空間を提供していた。近年では、アクティブラーニングへの転換が求められる中で、教室外でも協同的に学習できる空間が求められるようになった。ラーニングコモンズはこれに応える学修環境として、日本でもその数を増やしている。2012 年度の時点で、226 大学が“アクティブ・ラーニング・スペース”を設置している。その多くは図書館内にあるが（197 大学、設置大学の 87.2％）、図書館外に設置する大学もある（29 大学、同 12.8％）。2006 年度以前に設置していたのは 57 大学であるために、この数年で大幅に増えたことがわかる（文部科学省、2013a）。ラーニングコモンズを図書館内に設置するという決まりはないが、図書館に設置する理由について、呑海らは、どの部局からも中立であること、図書や学術雑誌など多くの学修メディアを有していることを指摘する（呑海ら、2011）。

ラーニングコモンズの始まりは米国でインフォメーションコモンズが登場した 1990 年代の初頭である。ラーニングコモンズは、インフォメーションコモンズと同義で用いられることもあるが、それが発展したものと位置づけられる。ラーニングコモンズへの発展は、知識の獲得から知識の創出に重点が移行する学士課程教育のパラダイムの転換を反映している。これが意味するのは、大学図書館にとって、授業で教員が伝えた知識の理解を深めるための場所や資料を提供するだけでは不十分であること、学生が自主的に問題を解決し、新たな知見を加えて発信するという学修活動全般を支援する施設、情報資源、サービスの提供を求められるようになったことである（米澤、2006）。

ラーニングコモンズとインフォメーションコモンズについて、以下、引用元の表現を用いるために 2 つの表現が併存するが、原則として、両者を同義で用いる。

3.2　ラーニングコモンズの設計

ラーニングコモンズの設計の要点は、何を設置するのかではなく、何をする空間であるのかを考えることである。これは、その空間で生じる利用者の活動やその活動を支援するサービスがその大学の教育の中でどのように機能するのかを勘案することを意味する。検討すべき点として、大学の教育目標、教育方法、学生の教室外の学修時間や学修行動、大学改革の動向などがある。その過程で重要になるのは、各大学の文脈を考慮することである。米国研究図書館協会が発行した『学修空間のための事前計画ツールキット』では、各大学の事情がラーニングコモンズの計画に影響を与えること、大学の組織、学生、教員、キャンパスと深くかみ合った建築計画が最良の計画であることを指摘する。そして、最良の計画にするためには計画段階で大学内のニーズを明らかにすることが重要になるとして、コメント用紙、昼食会でのディスカッション、学生や教員グループへの聞き取り、学内外の専門家からの意見聴取など多様なアセスメント評価の手法を解説している（Stuart, 2008）。Lippincott は、ラーニングコモンズを計画する関係者に、次の問いを提示している（Lippincott, 2006；加藤ら、2012）。

・インフォメーションコモンズの目的は何か。
・教員や学生のどのようなニーズに焦点をあてるのか。
・学修との結びつきを重視する場で、どのようなプログラムを実現するのか。
・キャンパス内のどの部署と関わり、どのように協働するのか。
・どのようなハードウエア、ソフトウエア、座席の配置が必要になるのか。
・どのような資質を持つスタッフが必要になるのか。
・インフォメーションコモンズと学修の結びつきをどのように促進するのか。
・成果をどのように測定するのか。

ラーニングコモンズの設計を主に担当するのは附属図書館の関係者である。施設部との協働に加えて、学内の人的資源を活用する例も見られる。大阪大学の理工学図書館では、キャンパスデザインセンターの建築学専攻の教員に、什器等の配置や配色を含む設計段階から協力を得て設計した（上原ら、2011）。三重大学では、附属図書館の改修時やラーニングコモンズの新設時に、建築計画学専攻の教員や学生と附属図書館の関係者が協働でラーニングコモンズを含む学修空間を設計したり、運用のあり方を検討したりしている（柴山、2011；Khasawneh, 2013）。

3.3　ラーニングコモンズの構成要素

図書館の構成要素は、情報・資料、施設・設備、図書館員（人的支援）である。ラーニングコモンズについても同様である。『Information Commons Handbook』の著者である Beagle は、インフォメーションコモンズを、学生や教員を含む大学の構成員のための新たなラーニング・コミュニティの物理的、仮想的、文化的な環境と規定し、物理的コモンズ、仮想的コモンズ、文化的コモンズという 3 つのレベルで使用してきたとする。物理的コモンズは、情報探索・整理・発信のためのハードウエア、印刷体や工芸品等の有形メディア、支援スタッフを備える物理的な空間である。仮想コモンズは、ポータルやウェブサイト等のネットワーク環境、データベースや電子図書等の電子メディア、e ラーニングの環境やコンテンツ、サーチエンジンやソフトウエアなどのウェブ上で利用できるツールであり、物理的コモンズが利用の窓口となる。文化的コモンズは大学の構成員が情報や知識のやり取りをしながら社会的・文化的に交流する場である。3 つのレベルは相互にかかわって機能するために、箱物としての物理的コモンズのみに注目するのではなく、仮想的コモンズや文化的コモンズも視野に入れた検討が求められている（Beagle, 2004；永田、2008）。

McMullen は、2007 年に米国で実施した 18 の大学図書館の調査をもとに、ラーニングコモンズの主な構成要素を 9 つ提示している。①コンピュータ・ワークステーション・クラスター、②サービス・デスク、③協同的な学修空間、④プレゼンテーション支援センター、⑤教育開発のためのインストラクショナル・テクノロジー・センター、⑥電子環境を整備した教室、⑦ライティング・センター、アカデミック支援の部署、⑧ミーティング、セミナー、レセプション、プログラム、文化行事のための空間、⑨カフェ、ラウンジである（McMullen, 2008；加藤ら、2012）。④⑤⑦⑧については、従来は図書館外にあった機能である。その機能を図書館に取り込むことは、図書館外の部署との結び付きを増進することにつながる（Bailey, 2008）。

以下、McMullen が示した枠組みにもとづき、主に国内の事例を用いて各構成要素を説明する（McMullen, 2008；加藤ら、2012；長澤、2012c）[2)3)]。

3.3.1　コンピュータ・ワークステーション・クラスター

学生は、コンピュータを利用して、電子ジャーナルやデータベースから必要な情報を得たり、デジタル化された教材をダウンロードしたり、収集した情報や教材を整理したり加工したりしながら学修を進める。図書館内外に独立したコンピュータ演習室を設けるのではなく、図書館内での学修行動を念頭に置いてコンピュータを配置する。デスク上に資料を広げるのに十分なスペースを設けるとともに、1 台のコンピュータの画面を複数の学生が共有しながら学修できるようにデスクの周囲にも十分なスペースを設ける。

コンピュータのレイアウトは学修空間の生産性にも影響する。クラスター式は、パネルによる囲いがなくてもプライバシーを確保しやすく、左右前後の利用者とのコミュニケーションもしやすい。Y 字型は、少人数のチームワークに適し、中央にある共用の作業面にプリンターや共用の資料などを置くことができる（FM 推進連絡協議会、2003）（図 1）。

多くの大学では、LAN（有線、無線）の環境や十分な数の電気コンセントを整備して、学生が持ち込んだコンピュータを利用できるようにしている。貸出用のコンピュータを用意する大学も増えている。お茶の水女子大学附属図書館

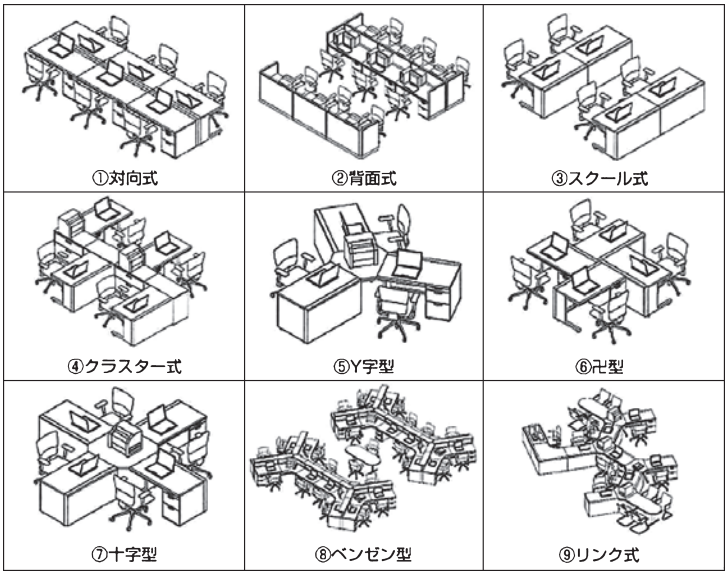

図１　ワークステーションのレイアウト形態の例（FM 推進連絡協議会、2003）

や明治大学和泉図書館では、館内に自動貸出ロッカーを設置し、学生証による認証で学生にノート型のコンピュータを貸し出している。

3.3.2　サービス・デスク

学生は、情報資源を効果的かつ効率的に探索したり文書その他のメディアで成果物を作成したりするなどテクノロジーを用いて多様な作業に取り組む過程で、探究活動とテクノロジー操作の両方に支援を必要とする。図書館員や情報システム担当の専門職員が、ラーニングコモンズ内に設置したデスクでこれを支援する。職員ではなく、学生アシスタントが対応することも多い。広島大学では、附属図書館の１階にあるラーニングコモンズの一角に総合案内カウンターを設け、サポートデスクとしている。図書館利用や資料調査に関する質問や相談については図書館員が、PC のサポートについては情報メディア教育研究センターのスタッフが担当する。相談に時間がかかる場合には、コンシェルジュコーナーに移動して対応する。千葉大学のアカデミック・リンク・センターでは、ラーニングコモンズ内に、学生アシスタントによる分野別の学習相談、図書館員によるレファレンスサービス、教員によるオフィスアワーのデスクを設けて、学生の学修を多面的に支援している。

窓口での直接的な対応だけでなく、ラーニングコモンズ内にパス・ファインダー（2.2 で前述）や図書を設置して、基本的な情報資源へのアクセスを支援する大学もある。名古屋大学ではテーマ毎のパス・ファインダーを、大阪教育大学ではデータベースの探索法に関する１枚ものの簡易ガイドを、パンフレット用のラックに配架している。図書については、上智大学で、レポートの作成法やプレゼンテーションの方法に関する図書、語学の辞書を可動式の小型の書架に整備している。名古屋大学では、ライティング関連の図書コーナーを設け、レポートや論文の書き方、大学での学び方、基本的な研究方法、英文ライティングに関する図書を提供している。

3.3.3　協同的な学修空間

協同的な学修空間はラーニングコモンズの中核である。可動式のいすやテーブル、ホワイトボードを組み合わせて、利用者自身が目的や人数に応じて学修環境をデザインできるようになっている。不要時に空間を有効に活用するために、いすは並行スタッキングできるものが多い。テーブルは複数を組み合わせて多様なレイアウトを可能にする小型のものが多い（図２）。広島大学では、一定数のいすやテーブルをラーニングコモンズの一角に折りたたんで備えている。ホワイトボードについては、縦長型、横長型などがある。可動式で小型のものが多く、仕切りの役割も果たす。名古屋大学や三重大学では、一面がホワイトボード仕様になった壁を設置している。学生は広い面を用いて、計算式やアイディアマップを展開させている。

開放的な空間に加えて、囲われた少人数のグループのための演習室を設置する大学も多い。プライバシーを確保しつつ、互いの気配を少し感じることによって、刺激をしあえる空間になっている。透明なガラスで囲うことが多いが、

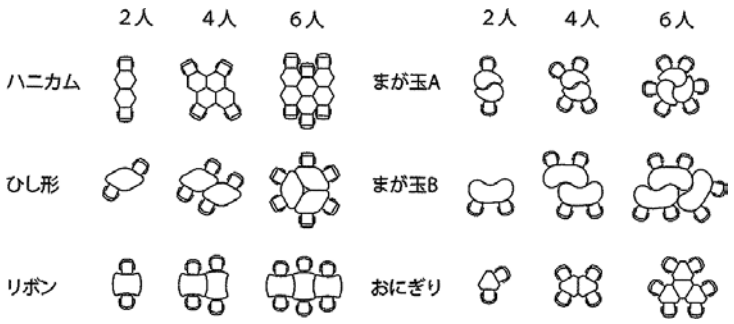

図 2　テーブルのレイアウト（山内ら、2010）

一部に半透明のフィルムを貼付し、演習室の利用者が作業に集中しやすくなるような工夫も見られる。明治大学和泉図書館には、8 名から 20 名までが利用できるガラス張りのグループ学習室が 6 室ある。各室は、可動式のテーブルやいす、壁付の電子黒板を備えている。利用は予約制で、学生は、図書館のウェブページから予約をしたり予約状況を確認したりする。

協同的な学修空間に加えて、集中して本を読んだり思考したりするための静かに学修する空間も重要になる。三重大学附属図書館では、耐震改修後に、フロアごとに音のレベルを設定した。1 階を Commons エリアにしてディスカッションや会話を可能にし、2 階を Quiet エリアにして小声での会話だけを容認し、3 階を Silent エリアにして会話を禁止し、タイピングもできない静寂の空間にした。明治大学和泉図書館では、入口から奥に行くほど、上階に行くほど静かな空間になっている。カーペットや家具の色も階によって異なる。1 階では淡い色調で曲線のある家具を配置して柔らかく親しみやすい印象を与え、上階では濃色で角張った家具を配置して重厚感を醸し、静かな空間であることを印象づけている。

3.3.4　プレゼンテーション支援センター

プレゼンテーション支援センターは、映像、音声、アニメーションなど多様なメディアを用いてプレゼンテーションの準備をしたり、ポスターセッション用の大判のポスターを印刷したりするための設備や機器を備える。米国のジョージア工科大学（Georgia Institute of Technology）の図書館では、ラーニングコモンズの一角にリハーサル・スタジオを設け、学生が図書館の開館中（日曜日の 12:00 から金曜日の 18:00 までと土曜日の 9:00 から 18:00 まで）にはいつでも予約して、プレゼンテーションの練習をできるようにしている。スタジオ内では、リハーサルの様子を録画し、それを再生して自己評価をすることもできる。同志社大学では、ラーニングコモンズの一角にあるプリント・ステーションで、ポスターセッション用の大判のポスターを印刷できるようにしている。

プレゼンテーション関係のセンターを持たなくても、ラーニングコモンズ内でプレゼンテーションができる環境を整備する大学は少なくない。名古屋大学では、ラーニングコモンズの一角にフレームで囲った空間をつくってプロジェクタを設置し、プレゼンテーションができる空間にしている。首都大学東京図書館のラーニングコモンズには、プロジェクタを備えた予約制のプレゼンテーションルームを設置している。

3.3.5　教育開発のためのインストラクショナル・テクノロジー・センター

インストラクショナル・テクノロジー・センターでは、教員が情報通信技術を用いて授業を設計したり学習管理システムやソフトウエアを使用したりするのを支援する。多くの場合、学内のインストラクショナル・テクノロジー部門が担当する。米国のジョージア大学（University of Georgia）では、独立館のラーニングコモンズ（Zell B. Miller Learning Center）内で、図書館、情報テクノロジー・センター、教育学習センター等が出張サービスを提供している。1 階に出張オフィスを持つ教育学習センターは、建物内の各教室に備えた設備や機器、教員の授業運営について、技術的な側面から支援をしている。

教員に対する支援について、支援を受ける姿を見られることに抵抗を感じる教員もいるために、これに配慮して、学生とは別の空間やサービスを用意する大学もある。米国のミシガン大学（University of Michigan）の図書館では、教員専用のコンピュータ演習室を設け、ここで教員対象の教育支援や研究支援に関するワークショップを提供したり、テクノロジー担当の専門職員や学生アシスタントが個別に支援をしたりしている。

3.3.6　電子環境を整備した教室

電子環境を整備した教室は、情報リテラシー関連の講習や教職員研修の場、予備の教室となる。講習で使用する教室には、20 台から 30 台のワークステーションを備えることが多い。予備の教室は小規模で、講師用のプロジェクタとワークステーションを備え付ける以外は、ノート型 PC を活用するなど高い柔軟性を保つ。廊下や壁で分断するのではなく、ラーニングコモンズと一体化してデザインする。お茶の水女子大学附属図書館のラーニングコモンズでは、利用者に開放しているコンピュータ・エリアの一部をパーティションで区切れるようにし、ICT 環境を必要とする授業や図書館が主催する情報検索演習の場として使用している（廣田、2011）。

3.3.7　ライティング・センター、アカデミック支援の部署

ワンストップサービスを実現するために、ラーニングコモンズでは、キャンパス内の学修支援や学生支援関係の部署と図書館の連携が多くみられる。主な連携先として、ライティング・センター、学生相談室、情報メディアセンターなどがある。カナダのクイーンズ大学（Queen’s University）には、図書館の 1 階にラーニングコモンズがある。その周囲には、図書館のレファレンス・カウンター、ラーニングコモンズの学生スタッフ用のカウンターに加えて、学習障がいを持つ学生のためのテクノロジー・センター、IT サービス部門、学修支援センター、ライティング・センターが出張オフィスを構え、質問を受け付けたり、ワークショップを開催したり、専門職員によるコンサルテーションを提供したりしている。

3.3.8　ミーティング、セミナー、レセプション、プログラム、文化行事のための空間

ラーニングコモンズは、学術コミュニティの一員であるという学生のアイデンティティを強化し、他の学生、教員その他のコミュニティの構成員との相互交流を図る空間にもなる。これによって、図書館がキャンパス・コミュニティ内外の知的・文化的活動のひとつの拠点になる。静岡大学附属図書館（静岡本館）内のギャラリーでは、新入生セミナーの成果や写真部の作品など学生や教職員の研究成果や作品を展示することで、出展者と来場者、来場者間の交流の場をつくり出している。お茶の水女子大学附属図書館では、ラーニングコモンズ内のラウンジで、音楽表現コース（芸術・表現行動学科）との協働によるピアノコンサートを定期的に開催している。昼休みなど限られた時間内の開催であり、予め告知をしているために、音が響くことに対する利用者からの苦情はない（廣田、2011）。学修活動との関連が深い行事として、徳島大学の学生チームである「繋ぎ create」が企画した「スタディーレスキュー WeeeeeK」がある（吉田、2013）。授業を担当する 8 名の教員がアドバイザーになってレポートや学修法について学生を支援するプログラムで、ラーニングコモンズが教員と学生の交流の場となった。

3.3.9　カフェ、ラウンジ

集中力を保ちながら長時間にわたって学修を続けるためには、休憩も必要になる。ラーニングコモンズや図書館内に飲食可能なエリアを設け、座り心地のよいソファやベンチを配することで、単なる小休止だけでなく、ゆったりとくつろぎながら本を読んだり談話したり、リラックスした雰囲気の中で議論をしたりする空間にもなる。

日本でも、カフェを設置する大学図書館が増えている。金沢大学附属図書館では、地元のコーヒー会社の直営店がコーヒーや軽食を販売している。明治大学和泉図書館内にあるコーヒー店の営業時間は平日と土曜日の 8:30 から 18:00 だが、18:00 から図書館の閉館時間（平日は 22:00、土曜日は 19:00）までは、自習の場として利用することができる。カフェの機能を自動販売機で代替する大学もある。お茶の水女子大学附属図書館では、入口付近にカップ式の自動販売機を設置し、ラーニングコモンズに隣接する交流エリアやラウンジで飲めるようにしている。立教大学池袋図書館では、館内の一室をラウンジにして、地元のパン屋の自動販売機と飲料の自動販売機を設置し、飲食ができる空間をつくり出している。

3.4　ラーニングコモンズの運用

ラーニングコモンズが教室外の学修環境として実質的に機能するためには、設計と運用を併せて考えることが重要になる。長期的な展望のもとで運営のあり方を検討して予算を確保するとともに、利用者にその存在や機能を印象づけることが求められる。山内は、学修環境の要素として、空間、活動、共同体、人工物をあげ、4 つの要素が総合的にデザインされなければうまく機能しないと指摘する（山内ら、2010）。ラーニングコモンズを設置したものの、学生が利用しなかったという経験を持つ大学も少なくない。学修環境の物理的な整備は出発点であるために、これを学

修環境全体のデザインにつなげる仕組みをつくることが必要になる。ここでは、人的支援、存在と機能の印象づけの観点から、その仕組みを説明する。

3.4.1　人的支援

多様な学修支援サービスを提供するラーニングコモンズでは、従来の図書館の人員だけで対応するのは難しい。多くの場合、他部署との連携や協働、学生アシスタントの活用なども組み入れて人的資源を確保している。

連携する主な部署として、情報メディアセンター、学生部、高等教育関係のセンターなど、学修支援や学生支援、教育開発を担当する部署がある。ジョージア大学では、3.3.5 で前述したように、図書館、情報テクノロジー・センター、教育学習センター等がラーニングコモンズでそれぞれのサービスを提供している。千葉大学では、附属図書館、総合メディア基盤センター、普遍教育センターが協働でアカデミック・リンク・センターを運営している。複数の部署が連携することによって、人的資源を確保できるだけでなく、学生や教員に対する支援のあり方を多様な観点から検討することができる。運営全般ではなく、プログラムのレベルでの連携もある。名古屋大学では、高等教育研究センターの教員と図書館員が連携して、学士課程の 1、2 年次を対象にしたレポートの書き方講座、TA を対象にしたライティングセミナーを開催している。大阪大学では、全学教育推進機構の教員と図書館員が連携して、「レポートの書き方講座」や「論文の書き方、文献の読み方プチゼミ」などの講習会を実施している（久保山、2012）。

学生アシスタントには、大学院課程の学生と学士課程の学生がいる。多くの場合、大学院生は有給でレポートの作成や情報探索などの学修支援を担当し、学士課程の学生はピア・サポーターとして無給で図書館サービス関係の業務を担当する。学生アシスタントは、対応できない質問等を受けた時には、適切な窓口や専門職員を紹介するなど、利用者と関連部署を仲介する役割を担う。お茶の水女子大学附属図書館には、アドバイザーとサポーターがいる。アドバイザーは有給の大学院生で、ラーニングコモンズや図書館のカウンターで学生の学修を実質的に支援する。サポーターは学士課程の学生が中心で、一般のアルバイトより低い単価の奨学金を得ながら図書館内の業務を担当する。サポーターはラーニングコモンズに直接の関与をしないが、図書館員の作業を一部代行することによって、その運営を間接的に支援していると言える。

3.4.2　存在と機能の印象づけ

利用者への印象づけの方法として、学内への広報、授業や講習会、教職員研修などが考えられる。

学内への広報について、徳島大学附属図書館では、Library Workshop という学生団体が、学生の図書館利用を促進するために、図書館員や大学開放実践センターの教員の協力も得ながら、広報誌を発行したり、図書の企画展示をしたり、イベントを計画したりしている。静岡大学附属図書館では、学生モニターが、ポスターやツイッターを用いて図書館サービスを紹介したり、学園祭で図書館関係のイベントを開催したりするなど、多様な案内をしている。ウェブページやソーシャル・ネットワーク・システムを活用した案内も増えている。これと並行して、個々の教員や学生のポストに紙版の案内を投函したり、学科の掲示板にポスターを掲示したりする取り組みもあり、新旧のメディアを組み合わせた多様なチャネルによる印象づけが図られている。

授業や講習会について、大阪大学附属図書館のラーニングコモンズでは、全学教育推進機構の教員が授業をしたり、3.4.1 で前述したレポート作成等の講習会を開催したりしている。同理工学図書館では、TA が講習会を企画・運営している。これまでに、「海外インターンシップ」や「工学系博士の歩き方」などの講習会が開催された（上原ら、2011）。

教職員研修について、三重大学では、ラーニングコモンズで、授業デザインに関する新任教員のためのガイダンスを実施した。教員は、参加者としてラーニングコモンズを利用することにより、利用者の立場でその存在と機能を知る機会を得た。

学生や教員を対象とする行事をラーニングコモンズで開催することは、参加者だけでなく、周囲の利用者にもラーニングコモンズの学修・教育支援機能を印象づける役割を果たす。また、図書館員がこれに関わることによって、図書館や図書館員の学修・教育支援機能についても印象づけることになる。

3.5　ラーニングコモンズの評価

ラーニングコモンズを評価するためには、入場者数、貸出用 PC やグループ学修室の稼働率、サービス・デスクで受けた質問の数などの量的データに加えて、質問の内容や利用行動などの質的データが重要になる。国内では、まず

は現状を把握する必要があるとして、図書館関係者や建築学の関係者が図書館やラーニングコモンズにおける学生の利用行動を調査している。立石は、横浜国立大学附属図書館の観察調査をもとに、学生の利用行動を明らかにした。具体的には、図書館内のエリアを細分化し、利用者がどこで何を使ってどのような行動をしていたのかを記録した。これをもとに、学生の利用行動は「勉強」、「飲食」、「話し合い・雑談」の順に多く、グループによる利用行動が1割以上を占めることを明らかにした。その他、学習者の使用品、滞在場所や滞在時間、個人やグループ別の滞在場所などを明らかにした（立石、2012）。三重大学では、建築計画学専攻の教員や学生、図書館情報学専攻の教員や学生、附属図書館の関係者が、多様な観察調査によって、ラーニングコモンズを含む教室内外の学修空間における学生の利用行動を調査している（Khasawneh, 2013；三根、2012）。

学修空間と学修成果の関係については、Given が、学士課程の学生の情報行動に関する研究の中で、カナダの大規模研究大学の教員と図書館員への聞き取り等をもとに、学生の学業を促進または阻害する空間について調査をしている。そして、学業の促進には、居心地のよい魅力的な空間、会話や協働などの社会的な結びつきを可能にする柔軟性の高い空間、騒々しい空間と静かな空間の両方を備えることが重要になることを報告している（Given, 2008）。

4. まとめと今後の課題

以上、大学図書館の学修・教育支援機能として、情報リテラシー教育とラーニングコモンズの動向を整理して述べた。情報リテラシー教育については、レポートやプロジェクトの学修成果の向上を目指して、多くの大学図書館が実施している。その中で、教員と連携して授業科目にカスタマイズした科目関連指導を実施したり、授業科目別のパス・ファインダーを開発したりする例も見られるようになった。ラーニングコモンズについては、近年、その数が大幅に増えている。その中で、協同的な学修空間やラウンジなど物理的な空間を整備することに加えて、教職員や学生アシスタントによる支援を提供して学修活動や教育活動の質的向上を図ったり、多様なイベントを開催して学術・文化コミュニティを形成しようとしたりする例が見られる。

近年、大学図書館の学修・教育支援機能を強化するために、数は多くないものの、大学の裁量経費や図書館の予算を工面した取り組みも見られるようになった。ミシガン大学では、部局に派遣された図書館員であるフィールド・ライブラリアンが部局の一員となり、教員や学生との交流を深めながら多様な図書館サービスを提供している（長澤、2013）。カナダのウエスタン・オンタリオ大学（University of Western Ontario）では、2003 年に策定された同大学の「情報リテラシー行動計画」を実現するために、教育支援センターに図書館員を配置し、学生の情報リテラシー教育のあり方を検討したり教員の授業設計を支援したりしている。また、直接的な取り組みではないが、アーラム・カレッジや静岡大学では、図書館の支援スタッフを雇用して、図書館員が学修・教育支援機能の強化に時間と労力を費やせる環境を整備している。

機能の強化の重要性を認識しながらも、多くの大学図書館は、予算が削減される中で、電子ジャーナルの価格の高騰、正規職員数の削減、職員の外部委託化への対応に追われている。そのために、大学教育改革の動向や大学図書館の学修・教育支援機能を十分に理解した図書館員が長期的な展望のもとで、継続的かつ安定的にこれに取り組む体制を整備・維持することが難しいという現状もある。各大学に求められるのは、大学図書館の運営体制の整備や強化も視野に入れながら、主体的な学びを支える大学図書館の機能強化に取り組むことである。

謝　辞

第 19 回大学教育研究フォーラムの小講演における発表の準備から本稿の作成まで、京都大学高等教育研究開発推進センターの関係者の皆様にはたいへんお世話になりました。心よりお礼を申し上げます。

本稿で紹介した事例のうち、アーラム・カレッジ、ミシガン大学、ウエスタン・オンタリオ大学、クイーンズ大学の調査・研究については、次の助成を受けています。アーラム・カレッジ：科学研究費補助金（若手研究 B）「ファカルティ・ディベロップメントの視点を取り入れた大学図書館の教育支援機能研究」（2004 年度及び 2005 年度）、ミシガン大学：科学研究費補助金（若手研究 B）「教育活動を背景とする教員と図書館員の協力関係：ミシガン大学の事例研究をもとに」（2006 年度及び 2007 年度）、ウエスタン・オンタリオ大学：科学研究費補助金（若手研究 B）「大

学教育における教員と図書館員の連携：ウエスタン・オンタリオ大学のケーススタディ」（2009 年度及び 2010 年度）、クイーンズ大学：東北大学高等教育開発推進センター・大学教育支援センター「大学教育マネジメント人材育成プログラム（Queen's-Tohoku Joint Program for University Education Managers and Developers）」教育関係共同利用拠点（国際連携を活用した大学教育力開発の支援拠点）「三重大学附属図書館が実施する学習支援・教育支援：教員と図書館員の連携の構築を中心に」（2011 年度）および科学研究費補助金（基盤研究 C）「大学教育における教員と図書館員の連携の構築に関する比較研究」（2012 年度から 2014 年度）。

註

1）　本稿は、京都大学高等教育研究開発推進センターが主催する第 19 回大学教育研究フォーラム（2013 年 3 月開催）の小講演の発表内容に加筆訂正したものである。

2）　文中の事例や事項については、各大学・機関のウェブページを参照した。

3）　文中の事例には、訪問調査によって得たデータも含まれる。調査対象の機関と調査日は次のとおりである。お茶の水女子大学附属図書館（2013-02-28）、立教大学池袋図書館（2012-11-28）、明治大学和泉図書館（2013-03-01）、静岡大学附属図書館（2013-05-17）、大阪教育大学附属図書館（2012-10-31）、広島大学附属図書館（2010-10-14）、徳島大学附属図書館（2012-11-30）、クイーンズ大学図書館（2011-09-29）、ウエスタン・オンタリオ大学図書館（2009-11）、ジョージア大学図書館（2006-11-21）、ジョージア工科大学図書館（2006-11-22）

参考文献・引用文献

Association of College and Research Libraries (ACRL) (2000). Information literacy competency standards for higher education. American Library Association.（日本語訳である「高等教育のための情報リテラシー能力基準」の全文について，ウェブ上で入手可能 http://www.ala.org/acrl/sites/ala.org.acrl/files/content/standards/InfoLiteracy-Japanese.pdf（参照 2013.12.4.））

Beagle, D. R. (2004). The information commons handbook. New York: Neal-Schuman.

中央教育審議会（2012）．新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて（答申）．文部科学省.

呑海沙織，溝上智恵子（2011）．「大学図書館におけるラーニング・コモンズの学生アシスタントの意義」『図書館界』359 号，176–184 頁.

FM 推進連絡協議会（2003）．『総解説ファシリティマネジメント』日本経済新聞出版社.

Given, L.（2008）．「学部生の情報行動のための舞台設定」Buschman, J., & Leckie, G. 編『場としての図書館―歴史，コミュニティ，文化―』日本図書館協会，261–279 頁.

Grassian, Ether S. (2004). Information literacy and instruction: Theory and practice. 2nd ver. New York: Neal-Schuman.

廣田未来（2011）．「お茶の水女子大学附属図書館の学生支援―ラーニング・コモンズと LiSA プログラム―」『情報の科学と技術』61 巻 12 号，489–494 頁.

石井啓豊（1999）．「大学図書館」『図書館情報学ハンドブック』第 2 版，丸善，846–850 頁.

Jacobson, T. E., & Mackey, T. P. (Eds.) (2007). Information literacy collaborations that work. New York: Neal-Shuman.

科学技術・学術審議会（2013）．学修環境充実のための学術情報基盤の整備について（審議のまとめ）．文部科学省.

科学技術・学術審議会（2010）．大学図書館の整備について（審議のまとめ）．文部科学省.

加藤信哉，小山憲司（2012）．『ラーニング・コモンズ』勁草書房.

Khasawneh, F. A. (2013) Student-centered learning pedagogy as innovative place maker in campus: Facility management research on learning spaces (dissertation). Mie University.

久保山健（2012）．「図書館スタッフによる学習支援の実践：「プレゼン入門　話す基本技術」」『大阪大学高等教育研究』1 号，77–83 頁.

Lippincott, J. K. (2006) Linking the information commons to learning. Oblinger, D. (Ed.) Learning Spaces. 7.1–7.18. An

EDUCAUSE e-Book.（www.educause.edu/learningspaces　参照 2013.10.16.）.
McMullen, S. (2008). US academic libraries. PEB Exchange. 1–6.
三根慎二（2012）「ラーニング・コモンズはどのように利用されているか―三重大学における事例調査―」三田図書館・情報学会研究大会発表論文集，25–28 頁.
文部科学省（2013a）．平成 24 年度　学術情報基盤実態調査：大学図書館編．文部科学省.
文部科学省（2013b）．大学図書館における先進的な取り組みの実践例（Web 版）．文部科学省．http://www.mext.go.jp/a_menu/kaihatu/jouhou/1341375.htm（参照 2013.12.4.）
長澤多代（2013）.「ミシガン大学の図書館が実施する学習支援・教育支援に関するケース・スタディ―フィールド・ライブラリアンの活動を中心に―」『Library and Information Science』70 号，177–217 頁.
長澤多代（2012a）.「大学教育における教員と図書館員の連携を促す図書館員によるつながり方の開拓―アーラム・カレッジのケース・スタディをもとに―」『日本図書館情報学会誌』58 巻 1 号，18–34 頁.
長澤多代（2012b）.「大学教育における教員と図書館員の連携を促す図書館員によるカスタマイズ型の学習支援―アーラム・カレッジのケース・スタディをもとに―」『日本図書館情報学会誌』58 巻 4 号，185–201 頁.
長澤多代（2012c）.「能動的な学習を支援する学習環境―大学図書館とラーニングコモンズ 1～4―」『教育学術新聞』2487–2490 号.
長澤多代（2007）.「アーラム・カレッジの図書館が実施する学習・教育支援に関するケース・スタディ」『Library and Information Science』57 号，33–50 頁.
永田治樹（2008）.「大学図書館における新しい「場」インフォメーション・コモンズとラーニング・コモンズ」『名古屋大学附属図書館研究年報』7 号，3–14 頁.
永田治樹ほか（2007）.『今後の「大学像」の在り方に関する調査研究（図書館）報告書』筑波大学（文部科学省「先導的大学改革推進委託事業」）.
日本図書館協会・図書館利用教育委員会編（2003）.『図書館利用教育ハンドブック―大学図書館版―』日本図書館協会.
野末俊比古（2010）.「情報リテラシー教育をめぐる理論」日本図書館協会図書館利用教育委員会編『情報リテラシー教育の実践』日本図書館協会，13–24 頁.
柴山依子（2011）.『大学キャンパスにおけるファシリティマネジメント（FM）に関する研究―PBL 授業とラーニングコモンズに焦点をあてて―』（修士論文）．三重大学.
Stuart, C. (2008). ARL learning space pre-programming tool kit. Association of Research Libraries.
立石亜希子（2012）.「大学図書館における「場所としての図書館」の利用実態」『Library and Information Science』67 号，39–61 頁.
上原恵美，赤井規晃，堀一成（2011）.「ラーニング・コモンズ―そこで何をするのか，何がやれるのか―」『図書館界』360 号，254–259 頁.
山内祐平，林一雅，望月俊男，西森年寿，河西由美子，椿本弥生，柳澤要（2010）.『学びの空間が大学を変える』ボイックス.
米澤誠（2006）.「インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへ―大学図書館におけるネット世代の学習支援―」『カレントアウェアネス』289 号.
吉田博（2013）.「学生が参画する教育改善・学生支援活動の効果検証に関する一考察―徳島大学学生チーム「繋ぎ create」の事例から―」『大学教育研究ジャーナル』10 号，9–20 頁.
渡邉貴子（2013）.「教員と職員の専門性をいかした協働の試み―教職科目における協働授業の実践―」『静岡大学教育研究』9 号，55–62 頁.